（参考資料）地球環境小委員会合同会議（H31.3.19）における委員発言概要

委員名	発言内容
山下	自給率の向上とどのようにバランスしていくのか。生産を増やせばGHG排出は増える。さらに輸出していくということであり、2050年という長期目標とどう折り合いをつけていくのか。
	バイオマス活用というのはあるが、地熱利用は加えないのか。
	漁船の電化のことは記載されているが、先進的な加工場は太陽光パネルを設置しており、漁業の現場だけではなく、流通加工のところも一緒に入れて頂ければありがたい。
椛島	海外から購入する原料に起因する負のダメージ、排出に寄与してしまっていることも大きいことから、海外に対して負のダメージを与えないということを検討頂ければと思う。
	CO2の削減とSociety5.0は密接な関係にある。AIによる省エネ型の農業であるとか、IoT、ICTといったワーディングがないので、追記を検討頂きたい。
	低エネルギー型農産物というのがなかなかピンとこない状況にあり、どのように消費者とコミュニケーションをとっていくのか、単にラベルというのではなく研究や技術開発が必要。
山川	水産は燃料多消費型の産業であるが、漁船の電化と最適な航路予測など技術的側面からの記述がなされているが、そもそも2050年を見通してということだと、産業構造自体をどうしていくのかとか、自給率や輸出との関係をどうしてくのかといった産業構造のグランドデザイン自体をどうしていくのかといった議論も必要になってくる。
小倉	いろいろなラベルがあり、消費者にとってわかりにくい。自分がこれを買ったらどこかの役に立つといった形での普及が進めばよいと思う。
	ラベルを進めるのも良いが、食品ロスの削減を強く進めていってほしい。
中田	ブルーカーボンとしては、昆布などの海藻よりも、海草の方が効果が大きく、魚の育成場としても役立つので、海草藻場と記載していただきたい。
白戸	炭素の負荷を小さくすることだけを考えると窒素の負荷が大きくなる場合もあり、総合的にいろいろな環境負荷を低減するということで炭素だけではないということがどこかに盛り込まれれば良い。
塚本	適切な森林整備とあり、これはすでに植えられているものについて整備していくという視点だと思うが、スギ、ヒノキが伐採時期にあり、今後新しい森林を作っていく場合にどのような森林にしていくのかといった視点も盛り込んで頂きたい。例えば早生樹であるヤナギやコウヨウザンを植えて、マテリアル利用やエネルギー利用していくといった取り組みもあるので、そのような視点も盛り込んで頂きたい。
	非住宅分野の木造化については未来志向で賛成する部分であるが、それと合わせて住宅部分や地産地消といった視点も追記して頂きたい。

（参考資料）地球環境小委員会合同会議（H31.3.19）における委員発言概要

委員名	発言内容
立花	木材利用という観点で木造化、木質化を広めるというところに商業施設について加筆していただきたい。
	「バイオマス資源を100%使い尽くすとともに長期に亘り繰り返し使用するカスケードシステムの構築」といった表現が良い。
	「エネルギーを創出する」といった表現があるが、「産出する」のほうが適切な表現だと思う。
鎌田	紙の世界でも森林認証のラベルを製品に貼って出す活動をやっているが、認知度が高まらない状況。ラベル化をすることによってどのように認知度を上げていくかが重要。
増本	農地と農地土壌という文言が使われているが、農地というと広がりが感じられ、農地土壌という点の感じがするので、言葉の統一をしてほしい。
	地域によって違うといった地域性の視点を入れてほしい。
青柳	気候変動の問題は、簡単に言えばエネルギー問題なので、農林水産業でどんなエネルギーをどういうふうに使っているのか、その使うエネルギーをどこから持ってくるのか、もしくは自分のところで産み出すのか、そういう研究なり議論が今後必要である。
井村	大変具体的な野心的なビジョンが作られていて、生産の現場としてはやる気が出てくる。是非お願いしたいのは、農家にこれを見せられてもわからない。農家が取り組みやすいようなものとなるような議論を今後深めていってほしい
	地域に親和性のあるテーマが多いので、地域でどう取り組むのかという視点を加えてもいいのかなと思う。
根本	わが国のエネルギー政策は、Ｓ（安全性）＋３Ｅ（安定供給、経済性、環境適合性）の考えに立脚しており、３Ｅのバランスを図ることを明記すべきである。
	「脱炭素社会」という用語については、より正確な表現として「脱炭素化社会」と改めるべきである。